

桑原博士の支那蒙古旅行

——「考史遊記」の刊行に際して——

森 鹿 三

桑原先生が官命を帯びて清國に留學せられたのは、東京高等師範學校教授から京都に新設された文科大學の教授に遷られる過渡時代のことである。明治三十九年に留學の命を受け翌四十年（時に先生齡三十八歳）四月發途、四十二年期滿ちて歸朝。この二個年の留學中、數次の長途旅行を試みられた。

第一回は洛陽長安方面の旅行で、明治四十年の九月三日に北京出發、京漢鐵路を南下して新郷で道清鐵路に乘換へ清化鎮で汽車を棄て孟津を渡つて洛陽に向ひ、更に西の方函谷潼關を経て長安着。十數日滞在して長安並びに咸陽、醴泉、乾州等をも探尋して歸途に就き洛陽より鄭州に出で京漢鐵路を北上して十月二十八日北京に歸着。所要日數五十六日、汽車便乗のものを除いても親しく目覩て足踏む地は三千支里に垂んとして

ゐる。この旅行には宇野哲人博士が同行された。宇野博士は鄭州から漢口に向はれた。

第二回は山東河南方面の旅行で、明治四十一年四月二十二日に北京發、保定で汽車を棄て河間、景州、德州、平原を経て濟南着。泰山に登り曲阜、鄒縣、嘉祥、金鄉を過ぎ開封に至る。此處から汴洛、京漢鐵路を利用し、途次彰德、正定、保定に下車、六月四日北京に歸着。前後四十四日、三千五百支里の行路である。

第三回は滿蒙支國境地帶の旅行で、第二回の旅行を終へて一月程した七月十六日に出發、古北口を過ぎて熱河に至り、平泉、大名城、赤峯、烏丹城を経てシラムレンを渡り林東着。踵を旋して西に向ひ林西、經棚を経て應昌城址に至り、それより南下して多倫諾爾に向ひ、張家口、宣化、懷來、居庸關を過ぎて八月二十

八日北京に歸着。この一月半の行程は矢野仁一博士が行を同じくされた。

第四回はその翌年春の江南旅行である。先生が留學を終へて北京を去られたのは明治四十二年二、三月の交であらうと思ふが、その途次上海に立寄り、杭州、紹興、鎮江、南京などの地方を巡歴された。後に述べる先生の「大師の入唐」によると杭州、紹興方面は長尾雨山、藤田劍峯兩先生が同行されたやうである。

以上は桑原先生が清國留學中の旅行路程の主要である。是に由つて觀れば支那史上の主要な遺跡は殆ど見盡された譯であり、支那歷代王朝の首都はほぼ遍く巡遊されてゐる。しかもそれは單なる視察や漫遊ではなく、先生の淵博な東洋史に關する學殖を實際に就いて質された研究旅行であつた。先生には有名な東洋史教科書の作がありその獨創的な體裁と整備せる内容は學界に著稱せられてゐるが、旅行に際しても常に東洋史全般に亘る廣い視野から事物を觀察されてゐる。餘談ながら先生の中東洋史二卷は明治三十一年、大學を卒業された翌々年、齡僅かに二十九歳の時の著作である。支那では早くもその翌年の光緒二十五年に東洋史

要と題してその翻譯が印行されてゐる。樊炳清なる人が譯し、羅振玉が題簽を署し、王國維が序を書き、東文學社で刊行したものである。東文學社とはその名稱からも知り得る如く、本邦の文物を支那に移植することを主眼とした學社で、羅氏が主宰し前述の藤田劍峯博士なども大いに援助せられたのである。王氏の序文にも「吾師藤田學士此書の大旨を論述し國維に命じてその端に書せしむ云々」とあつて、東洋史要の翻譯も藤田博士の慫慂に俟つものが多いであらう。翻譯はこの一書に止まらず、十年程遅れて商務印書館より出版された金爲なる人の譯したものなどは相當に版を重ねたらしい。當時この發行所商務印書館の編譯部面を主宰されてゐたのは、前述の長尾雨山先生である。彼此思合はせると明治後期に於ける日支文化交流の活潑な狀態が想見されるのである。ともかく桑原先生の東洋史は「支那の學者の範を此に取りて譯行仿撰すること一時の盛を極め、苟くも史學を談する者東瀛に桑原氏あるを知らざるなき」有様であつた。中東洋史が公刊されて以來、先生はその改訂修補に力められてゐるが、この留學中殊に支那各地の旅行に於て獲られた新

知見によつて補訂せられた所も亦少くないであらう。特に史蹟の圖版の如きはこの旅行中親しく撮影された寫眞によつて全く面目が一新されてゐる。

さて上述の四回の旅行中、最後の江南旅行を除いた他の三回の旅行に關しては文部省に呈出された報告書がある。先生の執筆された報告書そのものが文部省に現存するや否やは知らない。しかし文部省よりの交附を受けて歴史地理誌上に掲載せられたものがある。第一回の旅行から歸られたのは明治四十年十月二十八日であるが、借覽を許された先生の日記に據ると早くも十一月九日には「報告書ノ調製ニ從フ」とあり、翌四十年一月六日の條には「報告文起草ノ都合ニテ今日ヨリ三日間語學休講」二月三日には「文部省ニ報告書郵送」と見える。この報告書が即ち同年三月發行の歴史地理に掲載された雍豫二州旅行日記である。三月二十七日同誌を受取られた先生の日記には「歴史地理到來。同誌上ニ文部省ノ報告ヲ掲載セシニハ閉口ナリ」とある。この旅行日記は以後六回に亘つて連載された。第二・三回の報告書の調製發送については日誌に記されてゐないが、夫々山東河南地方遊歴報告書、東蒙古

旅行報告書と題して明治四十三年・四年發行の歴史地理誌に連載された。先生も閉口なりと記されてゐるやうに、もと必ずしも公表を豫期されてゐなかつたのであらう。しかし後世に傳ふべきこの貴重な資料を直ちに掲載した歴史地理の編者の機宜を得た處置は賞讃に値するであらう。

先生は旅行に先立つて萬全の用意をされたやうである。第一回の旅行に對しても六月十一日に「旅行里程ヲ取調べ」八月十九日、二十日の頃には「西安府志ノ抄寫ニテ非常ニ疲勞セリ」とあり二十二日に「服部氏ヨリ陝西通志ヲ送來ル」とある。當時京師大學堂總教習であつた服部宇之吉先生を介して大學堂所藏の陝西通志を借用されたのであらう。日記に散見する所を拾つても並々ならぬ準備の程が想見される。それ故にこそ歸來僅かの間にかゝる立派な報告書も調製されたと譯である。第二回の旅行に先立つて三月十三日に「服部氏ヨリ山東通志ヲ送來」と見える。第三回の旅行の如く匆卒の事ではあつたが、それでも承德府志、口北三廳志、キムベル、キドストンの蒙古旅行記を急ぎ抄寫された趣を矢野先生から拜聽した。かくの如

く十分な豫備知識を用意した上で實際に史蹟遺物を對質されたのであるから、まさに鬼に金棒といふべきであらう。しかも支那の文獻殊に地志にありがちの附會や誤謬に對しては常に警戒されてゐる。また一方根本資料となるべき碑碣の類には特別に留心されたやうであり、殊に周邊民族に關係あるものは尤も周到に注意を拂はれてゐる。その熱意は凝つて、開封の文廟に於ける金の國書即ち女眞文字を以て記す進士題名碑の發見ともなつたのである。旅行記には「予の開封を過ぐるは一に國書碑の探訪を以て目的となす」と記されてゐる。

この宴臺國書碑の發見を始め、長安旅行中に於ける大秦景教流行中國碑との奇しき因縁、山東靈巖寺に於ける日本入元僧邵元の撰する息庵禪師道行碑の探査、東蒙古旅行中に於ける遼の上京臨潢府の位置比定乃至は大名、應昌、上都諸城趾の調査等、東洋史學上幾多の新知見が包藏されてゐて、三十五年を距てた今日に在つてもその價值は些かも減じないのである。しかしこの旅行記を掲載せる歴史地理誌は現在入手し難く、また十數回に亘つて連載されたものであるから披見に

も不便であり、之を一括して複製することは皆人の冀望する所であつた。先生の薨後、その遺稿を類聚纂錄する際にもこの旅行記を一篇としてはとの話はあつた。しかしその時は東西交通史、東洋文明史、支那法制史の三論叢が出版されたにとゞまり、この旅行記類は何故か公刊を見るに至らなかつたのである。一昨年の初夏たま／＼令嗣武夫さんからこの旅行記の編輯についてわれら數名の者が委囑を受けたのである。その後遂に私が責任者として専らその事に當ることゝなつた。

この光榮に應へるため私なりの費心はした。まづ旅行記の本文であるが、先生の原稿は勿論なく、校訂本もないので、歴史地理所載のものを底本とした。前にも述べたやうな事情で、恐らく先生の校正を経てゐないのであらう、少からず誤脱が見受けられるのである。それであるべく誤のないものにしたといふ力めた。次にはこの旅行に際して先生の親しく撮影された三百葉に上る寫眞である。もと／＼歴史地理に掲載した旅行記には一枚の寫眞も添付されてゐなかつたのではあるが、折角残つてゐることでもあるからこの度の機會にできるだけ豊富に挿入したいと考へた。しかし此等の寫眞、

就中東蒙古、江南旅行の分は北京近傍のものと共に未整理のまゝであつた。それでその判定と整理には人をも煩はし少からず手間取つた次第である。ともかく一應の整理を終へて複製の段取りになつたのであるが、何分三十數年前のものであるから寫眞師、製版師は相當に辛酸を嘗めたやうである。更に讀者の便宜を計つて旅行路圖を添附することを企てたが、支那内地はともかくとして東蒙古旅行圖では地名の比定に疑問を生じ決定するまでには少からず時日を費した。あれこれの事情で徒らに遷延を重ね、殆ど滿二個年を要した結果になつた。この三月編者の手を離れ、六月に至つて成書を見たのである。

考史遊記といふ名は狩野君山先生がお附けになつたのであるが、誠に體を表はすにふさはしいものであらう。またこの度の纂修に當り雍豫二州旅行記を長安の旅、山東河南地方遊歴報告書を山東河南遊記、東蒙古旅行報告書を東蒙古紀行と改題した。江南旅行については報告書を呈出されなかつたらしく、日記なども頗る缺略が多いので、たゞ燕廬誌に掲載された南京よりの書信を収めるにとどめた。北京並びにその近傍の史

蹟も詳しく探尋されたいが、記文としてはたゞ燕廬と藝文とに觀耕臺なる一文が載せられてゐるのみである。之も考史遊記に收めておいた。北京、明十三陵、西陵の寫眞も數多く撮影されてゐるが遊記の應ずるものがないので收録を割愛した。江南各地の史蹟風物についても親しく撮影されてゐるが、十數葉を收録したに過ぎない。

この度考史遊記が出版されるに當り、先生と夫々東蒙古、洛陽長安旅行を同じくされた矢野、宇野兩博士からは眞情の溢れた序文を寄せられた。この書を読む人に貴い指針ともなるものであらう。更に宇野博士の長安紀行は、大正の初年に刊行された支那文明記中に收められてゐるが、先生の長安の旅と併讀すれば互に疏證する所あつて興趣深い。また先生が弘法大師降誕會で講演された「大師の入唐」（東洋史說苑所收）は、その緒言に

私は支那へ滿二年間留學いたした。丁度大師も二年間唐に留學されてゐる。大師が一年餘り滞在になつた長安には私も半月餘り滯留いたした。大師が福建から長安へ、長安から浙江へ往復されたその道筋の

半は千百年後に私も親しく通過した所である。この縁故により大師の入唐の時その往復に如何なる道筋をとられたであらう歟。その旅行は如何に困難であつたであらう歟。當時の長安は如何なる状態であつたであらう歟。大師は長安で如何なる行動をされたであらう歟といふ風の問題を當時の記録と私自身の體驗とを土臺として御話し申したい。

とある如く支那各地を旅行された體驗を以て活寫されてゐるだけに、また却つて本遊記の脚注ともすることが出来る譯である。本遊記に寄せられた宇野博士の序文に見ゆる馬車顛覆事件なども「大師の入唐」には眼前に髣髴せしめるやうに記されてゐる。本遊記を読む人はぜひこの一文を參看せられたい。

考史遊記の出版に關與した緣故によつて、日比野編修からこの書の紹介を求められたのであるが、詳しくは本書を見られればよいのであるから、たゞ平凡な事を記して責を塞いだ次第である。實はいろんな意味でこの書の出版は私にとつて荷が勝過ぎてゐた。まづ恩師の著作であることゝ編輯校正に種々障礙があつたこと、それに書物作りは初めての經驗であつたことなど

である。やつと出版を見るに至り、今は重荷を卸してホツトした所で、念入りに紹介もできかねてゐる。他日機を得て考史遊記の注解でもかければよいと思つてゐる。

昭和十七年六月 弘文堂發行 B5判
本文三一頁 索引三四頁 圖版二七一 挿圖四三

巴林と應昌

須佐嘉橋氏が昭和十三年東蒙古の各地を遍歴してその見聞を新京日々新聞に連載されてゐるが、それによると桑原、矢野兩博士が踏査されてより三十年間に於けるこれらの地の史蹟が如何に變遷したかゞ知り得られて興味深い。須佐氏のかつて拉林河畔に於て得勝陀碑を發見せられた東洋史學界の恩人である。得勝陀碑は、桑原博士の發見せられた宴臺國書碑や「考史遊記」に詳述されてゐる郎君行記碑と共に女眞語研究の貴重な資料であることは周知の事であらう。さて須佐氏の見聞録「元の史蹟を訪ねて」によると巴林の石橋に立ててあつた蒙古文の碑が昭和十二年夏の大水のために流されたりしく、須佐氏がこの地を訪ねた時には熱河土木局の人の手によつてこの碑が救出されてをり、須佐氏は之を詳しく紹介されてゐる。この碑は恐らく「考史遊記」に

巴林南北二橋の間に碑亭あり。咸豐六年建つる所の漢文及